

---

# 失恋記

sprint

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

失恋記

### 【Nコード】

N6431D

### 【作者名】

sprint

### 【あらすじ】

「失恋」。ほとんどの人が経験した事があるだろう。辛く、悲しく、とても切ないもの。誰もが思い出たくない過去。そんな私もたった今、フラれてしまった。初めて勇気を出して言う事が出来たのに……。

## プロローグ（前書き）

初めて女視点に挑戦です。

普段よりもさらに読みにくくなってしまうと思いますがどうか最後までお付き合い下さい。

## ブローグ

「好きです!! 付き合ってください!!」

とずっと言ってしまった。

一瞬で終わる言葉なのに異常に緊張する。

手に汗は掻くし背中に冷や汗は掻くし心臓はバクバクだし・・・。

「ごめん・・・俺、好きな人いるんだ・・・」

（えっ？）

思いを伝えられた喜びに浸れたのもつかの間。

そう、私はこの瞬間失恋してしまったのだ。

## Episode 1:初めての失恋(前書き)

設定では、この子は告白したのが初めてという設定になっております。

一応、モテキャラにはしない予定です^^;

## Episode 1：初めての失恋

今、ちょうど告白をしたばかりの女子と告白されたばかりの男子がいる。

女子の名前は水野楓<sup>みずのかえで</sup>

他でもない「私」だ。  
一応中学生やってる。

一方、私の目の前にいるのが望月翔太<sup>もちつきじょうた</sup>  
・・・私がずっと好きだった先輩。

運動も勉強もバッチリできて尚且つルックスも良い。  
所謂、モテモテキャラ。

もちろん性格も良くてチャラチャラなんてしてない。  
寧ろ爽やかなイメージが強すぎていくらモテても誰もそんな事言う人はいない。

そんな望月先輩の事がずっと好きだった。

バレンタインである今日、勇気を出して告白したんだ。  
けど、結果はこの通り。

まあ、当たり前なんだけど・・・。

先輩みたいな人が私なんか振り向いてくれるわけないもん。

こんなすごい人が振り向いてくれたら奇跡。

そりゃ、私がすぐく可愛くて勉強とかもバリバリに出来たら別  
なんだろうけど・・・。

頭の中ではわかってた。

でも体と心がついていかない。

どうしてもこの気持ちを抑える事が出来なかった。

なんで？

最初から傷つく事がわかってるなら告白なんてしなればいいのに。  
告白したってダメなものはダメなんだよ。

ちゃんと先輩は答えてくれたんだからお礼言わないと。

「いえ、ちゃんと言う事が出来てよかったです。私じゃダメな事も  
わかってましたし・・・。」

なんて嫌な女なんだろう。

これじゃいかにも「同情してください」って言っているのと同じじ  
ゃん。



こんなんだからフラれるんだよね。

泣いたら先輩を困らせるだけなのに涙が出てくる。  
本当は堪えたいのに堪えることが出来ない。

「うつん、嬉しかったよ。ありがとう、ごめんね。」

先輩、微笑んでくれる。

こんな嫌な奴なのに・・・。

なんでこんなに優しくしてくれるの？

どうせだったら思いっきりフってくれればいいのに。

これじゃまた好きになっちゃうよ・・・。

先輩の事、諦められなくなっちゃうよ・・・。

失恋ってこんなに悲しいものなんだね・・・。

## Episode 1：初めての失恋（後書き）

季節が季節なんで季節感を出してみました。

この二人や他の登場人物の詳しい紹介は次に書きたいと思います。

## Episode 2: すつきりしない一日

次の日の朝。

泣きながら寝ちゃったみたい。

枕が少し湿っている。

普段なら気持ちの良い朝なのだろうがテンションは最低。  
家族のみんなから「風邪でも引いたの？」と聞かれる。

もう、うざったいな。

ほっといてくれればいいのに。

私は無言で学校へ出発する。

玄関を開けると幼馴染である西脇信二にしわきしんじと宮部由梨みやへゆりが待っていた。

「楓、遅い！ 早く行こう！」

「そうそう、早めにな。」

この二人とは幼稚園からずっと一緒。

恋バナとかも普通にするし、お互いの悩みも相談してる。

相談、してみようかな・・・？

信二はサッカー部に入ってて真正正銘のサッカー馬鹿。

サッカーの話をさせるとこっちが相槌を打たなくてもマシンガントークが炸裂するし。

でも普段はクール。悪く言えば冷めてるけど。

サッカーの事しか考えてないように見えるけど可愛い面とかあって面白い。

そうそう、意外と頭良くて何気に成績は上位組。

由梨は見た感じ超お嬢様キャラ。

なんというか凄い人特有のオーラが出ちゃってる。

何もしゃべらずにボーっと立ってるだけで絵になる感じ。

でも、全然堅苦しくなくてメチャクチャ元気。

あまりのハイテンションさに私が疲れちゃう時もしばしば・・・。  
私とは大違いでモテモテ。

信二曰く男子の中では「高嶺の花」と呼ばれているらしい。  
部活のバドミントンでも部長さんやってるしね。

そんな中で私は至って普通。

あ、ちなみにテニス部。

告白されたのだって一回か二回だし男子からチャホヤされるわけでもない。

勉強だって平均点くらいの点数がつらつらと並んでるくらい。

テニスは地区大会止まり。

何かに秀でてるってのが無いんだよね。

この二人が凄すぎていつも私は「引き立て役」っぽくなってる。  
まあ、実際そうなんだろうけど。

二人といつもと変わらぬ会話をしてるうちに学校に着いた。  
よく考えたら今日、一時間目から数学じゃん。

図形の証明とか嫌だなー。

それに、今は昨日の事で頭が一杯になっちゃってるし・・・。

・・・今度、由梨と信二に聞こ。

本当にこんなんで高校いけるのかな。

一日の授業が異常なほどに長く感じたがなんとかすべて乗り切る事が出来た。

全部右から左だった気がするけどしょうがないかな。

今日は部活無いから二人に相談してみよ・・・。

私は信二と由梨に相談する事にした。

## Episode 2: すつきりしない一日 (後書き)

間が空いてしまって申し訳ないです。

気長に読んで頂けると嬉しいです。

またまた主人公の周りにはすごいメンバーが多いですが (笑)

### Episode 3：最高の幼馴染

信二と由梨に相談する事にした。

（でも、どうやって切り出せばいいかなあ・・・。）

歩きながら一生懸命考える。

（やっぱり恋バナから入るかな？）  
今はちょうど三人で帰ってる時だ。

変に誰かに聞かれる心配もない。

（よし、持ちかけてみよう。）

「ねえねえ、二人とも今好きな人とかいる？」

「い、いきなりなんだよお前つ。・・・いないけど。」

真っ先に答えたのは信二の方だった。

普段はクールな信二が珍しく動揺してる。

「うーん、一応いるかなー。まあ今は内緒だけどね。楓は？」  
何もかも見透かしているかのように目を細めて由梨が言う。

（今がチャンス！）



「・・・いたけどフラれちゃった。」

「えっ?!」

二人揃って声を上げる。

特に驚いていたのは信二だ。

(そんなに恋しないみたいに見えるのかなあ・・・)

心の中ではそう思った。

「そんなに驚かないでよ。昨日ね。」

「だから楓、今日元気なかったんだ。」

由梨が納得したように頷く。

「で、相手は誰？」

興味津々に問いかけてくる信二。

「・・・望月先輩。」

「あの人かあ。結構モテてるよなー。っと、ごめん。」

「ううん、いいの。ほとんど諦めてたし。」

言い訳ともとれる発言。

というか負け惜しみの方が意味合いとしては近いかもしれない。

自分でもそう思ったところに信二がツツコミを入れた。

「でもさ、最初から諦めてたら告白なんてしないだろ？」

ズキッ。

心に何かが突き刺さる。

確かに最初から諦めてたわけではない。

むしろ諦められるのであれば、とっくに諦めている。

矛盾した事を言っているのは確か。

諦めたいけど諦められない。

そんな自分に腹が立ったのかわからないけど泣いてしまった。

「諦めたいよ・・・でも、諦めきれないじゃん・・・」

ここで泣いたって二人を困らせるだけ。

何の解決にもならない。

頭ではわかってるのに体が言う事を聞かない。

私のせいで少しの間気まずい雰囲気になってしまった。

そこに先ほどまで黙っていた由梨が口を出す。

「なら、忘れられるまで好きでいてもいいんじゃない?」

思いがけない答えだった。

第三者から見れば簡単に出る答えなのかもしれないが私の中には「諦める」という選択肢しかなかったから。

「で、でも先輩に迷惑じゃ・・・」

信二も由梨も呆れたようにため息をつく。

「そりゃ、ずっと付きまとったりしたら迷惑だろうけど想うくらいなら平気だろ。」

「そうそう。少し時間はいるかもしれないけど、時間がたてば忘れられるって!」

ニツコリ笑って私を励ましてくれる。

本当にこの二人に相談してよかった。

「ありがと・・・少し距離を置いてもう一度落ち着いて考えてみる。」

家に帰ってからずっとその事ばかり考えていた。

距離を置く、って言っても元々距離が近かったわけじゃないし・・・意識して会わないように、って言っても変に意識しすぎちゃって逆に変。

どうする事も出来ない。

ずーっと考えながら部屋で本を読んでいると携帯が鳴った。

（誰だろう・・・あ、信二からのメール。）

「あんまり考えすぎない方がいいよ。他の事に気を紛らわしたりしたりするとか。」

信二・・・。

心配してくれたんだね。

本当に感謝してる。

その事を素直にメールに打ち込んで送信した。

（ふう。）

一息ついた。

肩の力が一気に抜ける。

やっぱりフラれた後ってのもあって心にポツカリ穴が空いたみたい。

ずっと胸のあたりがもやもやしたまま。

（先輩の好きな人・・・誰なんだろ。）

羨ましく思う気持ちとそれを妬む気持ちが入り混じっている。

ずるいとはわかっているけど、どうしてもそう思ってしまう。

私・・・本当に先輩のこと、まだ好きでいてもいいのかな・・・？

### **E p i s o d e 3 : 最高の幼馴染（後書き）**

こちらは完全に不定期更新になりそうです（汗  
あまり構想を練らずに書いたのが間違いでした^^；

気長にお待ち下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6431d/>

---

失恋記

2010年12月12日00時30分発行